volonté)である。デュルケムの道徳教育の提唱は、以上の主要な道徳的諸要素を若い世代の内に形成することであった。それは社会生活、特に道徳生活の圧倒的な他律性の中に知性の自覚による自律性を確立して、社会の中に個人を位置づけて正常な社会的統合を期待することであった。具体的には、子供の心理、初等学校の教師のあり方、学校という集団のもつ教育的意義、教育内容等が論じられている。

さて、教育は全体社会の歴史や文化に規定され、それらを反映する像であるから、社会の健全な状態が要求される。「規律の精神」が現実社会において生きたものでなければならないし、「愛着」を寄せるべき社会集団が病理的であってはならない。だから、教育改革は社会改革を前提としなければ意味がない。デュルケムは『自殺論』の頃まではそのように考えていた。しかし、アノミーの救済として先行していた職業集団の提唱は、確かに政治的解決を含む社会改革が意図されていたが、国家と個人に介在する職業集団とその代表機関としての国家との役割では、産業界の病理には有効でも、全体社会のすべての成員の道徳生活に蔓延しているアノミーを救済するには不充分だとデュルケムには考えられた。つまりアノミーを大衆レベルで捉え直し、道徳生活の根底が形成される教育に注目したと思われる。換言すれば、アノミーを克服する方法として彼が好んで取りあげる直接的な心的相互作用による社会的連帯のモデルを、学校における教育過程に見出して希望を託したのであろう。

(付記、註は割愛した)

近世土佐の陰陽師系宗教者
——陰陽師と博士——

木場明志

日本の陰陽道の歴史ほど疑問が多く、従って興味深いものは少ない。これを正史に出る史料や陰陽道の勘文などを並べて記述することは容易であるが、それでは古代社会崩壊以後の、陰陽師が宮廷の庇護を離れて田舎わたらいを始めてからの歴史は除外されてしまう。宮廷から離れた時を起点に、陰陽道は人間生活との関わりあいを深めて日本民族の宗教となったというべきであり、こうした陰陽道がやがて近世の下級宗教集団の中に姿を表わすのである。ここでは、その時点を捉えて近世の土佐国にみられる陰陽師系の宗教者についての史料を追おうとする。

陰陽師というのは端的にその機能方面からいうならば呪術宗教者であるが、民間宗教者においては、種々名称は異なってもこの陰陽師の系列に含められるものが多く認められる。例えば「博士(はかせ)」であるが、これも陰陽師の異称として扱われてきている。しかし、近世の土佐国における場合、「陰陽師」と「博士」の呼称は別途に使われ、各々異なる者を指していたのである。

高地県地方史研究の長老である平尾道雄氏の著書『近世社会史考』に負うと、陰陽師には一本職・本組・弟子座の三階級があり、嘉永・安政年間にはそれぞれ一四人・五九人・四六人であったと

知られる。そして明治三年三月調査では陰陽師は一三〇戸で、一戸一人とみても嘉永・安政期の三階級総数一一九人より増加をみている。また博士については中途断絶の永野喜太夫家と、連綿と続いたという芦田主馬太夫家を博士頭として、嘉永・安政期には一一〇人がいたとされる。

そこで、土佐国での陰陽師と博士との実際上の職分の違いはどうであったかというに、高知県立図書館蔵三谷家文書『長岡郡豊永郷西峰在住陰陽師吉太夫始末書』によると、陰陽師と称される者は天社神道、すなわち古代の陰陽師安倍晴明の末流を名乗る安倍神道の組織下にある者であったとわかる。三ヶ条の誓約文があるうち、二ヶ条はその天社神道を法式通りに行なえというものであり、いま一ヶ条は米占と弓祈禱の禁止である。この禁止事項は博士との違いを判然とさせるものであり、まず弓祈禱については、文化一一年の『土佐国職人絵歌合』（若尾本）に博士を詠じて、「かしこしな梓の弓に犬神のうらみもはれていつる月かげ」と、博士が梓弓を用いて祟(たたり)を祓うを職分としていたことを示している。これには挿図があって、手箱の蓋に弓を縛りつけて細棒で弓弦を叩き御幣を振る博士の姿がみられる。また米占というのは盆の上にふま米といわれる洗米一升二合を少しずつ上から落としながら盛り、その米の流れぐあいで各種の占いをなすものである。ことに弓祈禱は病気を治す病人祈禱にその主たる目的があったから、天社神道としては表面上、俗信にも近い民間祈禱的方法は認め得なかったということと思われる。陰陽師と博士の職分が紛れるところがあっての始末書であろうが、『南路志』所収の博士頭芦田主馬太夫家文書には「此節於在新法之はかせ個間敷者出来筋目之者共之妨ニ成」とあって、他にもはかせがましき者までがいて村々に祈禱や占い全般を行なっていたようである。

陰陽師が天社神道傘下であったに対して、博士では博士頭が一応は直接の取締りを司っていたとみられる。『土佐国職人歌合余考』には、「或筆記の写」として、芦田主馬太夫が「博士一座ゟ役銀として六百匁充所務いたし来候事」と、配下の博士から役銀を徴収していたことが記されているからであるが、博士頭といえば一宮での千部経執行の際の警固役を以て衆庶に知られている程度のものであって、その支配権はそれほどではなかったようである。この博士頭芦田氏も、「本尊は摩利支天を祭りて中臣秋を執行する」（南路志）という祈禱宗教者であった。

土佐香美郡の旧槙山(まきやま)郷について記した『槙山風土記』によると、文化一二年には陰陽師および神子が合わせて四九軒あった。そしてその隣村旧韮生(にろう)郷には文化八年で神主・社人・陰陽師・神子を合して二一軒であった（御奉行所様就御巡見御道引帖）。陰陽師が神子(みこ)や神主などと似通った宗教活動をしていたことが推察されるのであるが、大略この両郷を合併している現在の物部村を中心に伝承され現行されている「いざなぎ流神道祈禱法」というのは、使用の祭文中に自らを称して「かんなぎはか正」とか「じよもんはかしよ」などと、主に「博士」の呪法であったことを示しているので、近世史料にある陰陽師は天社神道配下の者、そして神子というのは博士、もしくは博士と博士がましき者を含んだ徒輩に当ると思われる。博士といわず神子とあるのはその存在形態から

と考えられ、梓巫として活動していたこと、そしてミコガミサマを奉じて自らもまたミコガミになるという特徴を有したからであろうと思われるのである。

在地においては、現在もそうであるように、陰陽師も博士もともに在俗下級神主を指す「太夫」の名で呼ばれており、民俗誌も「太夫さんを呼んで祈禱してもらう」とあるばかりで、それが陰陽師だったのか博士だったのかは明確でないのが常である。事実、その出自において両者にそれほどの隔りがあったとは思われず、一般的に陰陽師の多い郡には博士少なく、博士の多い郡には陰陽師が少ないことからすると、単にどちらの組織に組込まれたかによって分かれた部分もあったと思われる。博士の使った「いざなぎ流祭文」は中世祭文のなごりを留めているとされるが、陰陽師を組織した天社神道が起こされたのは近世であるから、両者の淵源に強いて差を求める必要はない。しかしながら、神子的宗教者のある部分が後世において陰陽師となっているからには、そこには何らかの理由なり契機が存在しなくてはならない。今ここに一つだけ示し得るのは、陰陽師が長岡郡に集中していることについてである。

天社神道の創始者は安倍泰福であるが、民心に深く根ざした陰陽五行説を利用して、幕府天文方の渋川春海の協力を得て垂加神道創唱期の山崎暗斎の門に入り、その直弟子ともなって天社神道を国家的ならしめ、かつ諸国に陰陽師免許を出すまでに発展したのであった。渋川春海もこの系統で名をなしたが、この弟子に谷重遠がいる。谷重遠の著『秦山集』には、「能伝二上古之風一深知ル二王者之天業一者莫レ如二安家一、雖ニ吉田一不レ及也、諸家不レ知レ此、只為二卜筮祈禱之家一、可レ恨也」とあって、安家すなわち天社神道を第一と奉じている人物であるが、この人は土佐長岡郡八幡村別宮八幡宮祠官の家柄であり、このことが、長岡郡の陰陽師系宗教者を陰陽師として天社神道に参与させた一要因ではないかと思われるのである。

土佐の陰陽師と博士とについて、その異同の一端を示した。

五行志の性格について

今井秀周

五行志は『漢書』に初めて設けられた、様々な自然現象や不可解な出来事を分類配列し、陰陽五行説を基盤とする思想によって解釈を加えたものである。ところが、それら神秘的なそして論理的にはこじつけともいうべき思想は、漢代を頂点として衰えるにもかかわらず、五行志は依然として歴代の正史に継載されていった。それは何故か。また、志なるものは、単なる滅びた王朝の諸文化の記録としてばかりでなく、その修纂を命じた者にとって為政に積極的に使用すべき資料でもあったと考えられるが、しかしながら五行志の存在意義は、他の諸志に比べるとどうも漠然としてとらえ難い。そこで甚だ簡単ではあるが、ここに歴代五行志の内容変化を跡づけると共に、その性格を考えてみようと思う。

まず『漢書』五行志の著わされた目的は何であったか。その序